愛のない政略結婚のはずが、許嫁に本気で迫られています

水城のあ
Noa Mizuki

Eternity
BUNKO

目次

愛のない政略結婚のはずが、許嫁に本気で迫られています　5
思い出のバースデー　287
書き下ろし番外編
Happily ever after　303

愛のない政略結婚のはずが、
許嫁に本気で迫られています

プロローグ

毛布に包まれているよりも暖かくて、いつまでもまどろんでいたくなる……そんな温(ぬく)もりに包まれ、百花(ももか)はその熱に子猫のように身体をすり寄せる。

自分のものではない香水の匂いに思わずクンクンと鼻を動かす。知っているはずなのに、この暖かさとは結びつかない。

この温もりの元が知りたくて、百花は眠気に抗(あらが)いながら重い瞼(まぶた)を上げた。

視界に飛び込んできたのは——白いシャツ。

ボタンを数えるようにして頭をもたげると、ボタンが外れた襟元(えりもと)から覗く筋張(すじば)った男性特有の首筋が、ゴツゴツとした顎(あご)の輪郭(りんかく)に繋がっているのが見える。

どうして自分の隣に男性が眠っているのだろう。不思議に思いながら目を閉じて、次の瞬間ギョッとして目を見開く。

「……ッ!?」

この世に生を受けて二十三年。男性と交際したことのない自分に、こうして添い寝をするような男性はいない、はず。百花はもう一度シャツから首筋、顎、そしてその先へと視線を上げて見覚えのある顔に目を丸くした。

「透(とおる)、くん……？」

百花を抱きしめるように身体に腕を回して眠っていたのは、幼馴染(おさななじ)みの神宮寺(じんぐうじ)透だった。

幼馴染みと言っても、正確には透とは九つ年が離れていて、百花の兄と同い年だ。親同士が親しく、自然と年の離れた百花も妹のように可愛がってもらうようになった。

現在、透は都内のマンションで一人暮らしをしており、百花も何度か遊びに行ったことがある。もちろん寝室に入ったことはないが、ここがホテルでないとすれば彼の部屋である確率は高い。そんなことを考えているうちに、少しずつ昨夜の記憶が蘇(よみがえ)ってきた。

昨日は会社の部内で懇親会があり、その最後に透が顔を出したのだ。百花は二次会にも参加するつもりだったのだが、飲み過ぎて思っていたよりも酔っ払っている百花を見た透に強制的にタクシーに乗せられたのを思い出した。

どうやらそのままタクシーの中で眠ってしまった百花を、透がベッドまで運んでくれたらしい。

ちなみにどうして幼馴染みの透が百花の職場の懇親会に顔を出したかというと、会社を透の実家である神宮司家が経営しているからである。透自身も先日専務取締役に就任

したばかりだった。

透の父が経営している株式会社ＢＯＮ（ボン）は全国各地で高級旅館を運営している会社で、近年は首都圏でのウエディング事業にも力を入れている。

ＢＯＮはビューティーズオブネイチャーの略で、フランス語で「良い」を意味する言葉でもある。

名前の通り各地の旅館は花鳥風月をコンセプトに、日本ならではの自然の美しさを国内外の人たちに楽しんでもらうことをモットーにしている。

百花は透や両親の勧めもあり、去年の春からウエディング事業部の広報室で働いていて、昨夜はその集まりだったのだ。

これで透と一緒にいる理由には説明がつくが、なぜ彼のベッドで、しかも彼の腕の中で眠っているのかが謎だった。

どうにもそれ以上謎が解明できず、もう一度まじまじと透の顔を見つめたときだった。

「う、ん……」

透が小さな声を漏らし、わずかに腕の力を緩めた。百花はすかさずその腕の中から抜け出し起き上がる。するとそれに気づいた透が、うっすらと目を開けた。

男性にしては長く反り返った睫毛（まつげ）が小さく震えるのを見て、百花の胸の奥がざわりと騒いだ。

「ん～……モモ、目が覚めた？」

眠たげな声はいつもの透なのに、なぜか警戒している自分がいる。昨夜の記憶が曖昧で、何かやらかしてしまったのではないかと心配だった。

「お、おはよう……」

「うん」

百花にずっと腕枕をしていたから痺（しび）れたのだろう。透は伸びをしながら起き上がると、首を左右に揺らしたあと二、三度肩を竦（すく）めるようにして身体をほぐす仕草をした。

「あのさ、昨日って……」

「モモ、覚えてないの？　やっぱり連れて帰ってきてよかった。俺が店に行ったらかなり酔ってたからびっくりしたんだぞ」

透のいつもは柔和（にゅうわ）な目が怒ったように眇（すが）められるのを見て、百花はしゅんと肩を落とした。

「ごめんなさい。最初はサワーを飲んでたんだけど、先輩にここは美味しいワインを置いてるからって勧められて、飲んじゃったんだよね」

「まあ先輩に勧められたら断れないのはわかるけど、ちゃんぽんはだめだろ。ワインはアルコール度数も高いしモモはそんなにお酒強くないんだから」

「うん」

「昨日の酔い方じゃ誰かにお持ち帰りされても文句言えないぞ」
「……ごめんなさい」
透の言う通りなので、しょんぼりと下を向くしかない。
そんなにお酒が強くないのに、あの飲み会独特の雰囲気の中だと、つい気持ちが高揚して調子に乗ってしまうのだ。学生時代にも何度か飲み過ぎてひどい目に遭ったことがあるのに、どうにも学習できない自分が恥ずかしい。
「別に謝らなくていいって。それより具合悪くない？　酔ったまま寝ると二日酔いになりやすいから」
透は落ち込んだ百花の気を引き立てるように笑うと、手を伸ばして頭をポンポンとあやすように叩いた。
「平気。でも透くんがいてくれて良かった。だって、透くんが連れて帰ってくれたのなら、後で何があったとか騒がれなくて済むもんね」
社内で透と幼馴染みであることを隠していないので、変な噂が立つこともない。これが他の男性社員相手だったら、あれこれ邪推され騒がれることは間違いないだろう。
「まあ、それはそれで問題なんだけど」
「え？　問題？」
透の溜息交じりの呟きは百花の耳には届かず聞き返すが、透は微かに眉を寄せ小さく首を振ってから、いつもの笑顔になる。

「モモの家には連絡入れてあるから問題ないよって言ったの。無断外泊なんかしたら拓哉が大騒ぎするぞ」
透の言葉に、思わず兄の顔を思い浮かべて身震いする。歳が離れているからなのか、拓哉はとにかく過保護で、大学生の頃は飲み会で少し遅くなろうものなら携帯に鬼電がかかってきて、百花が家に帰るまで起きて待っているという徹底ぶりだった。
さすがに社会人になってからは、付き合いもあるからとそこまでうるさくなくなったが、やはり無断外泊はまずいだろう。
「お兄ちゃん、怒ってなかった？」
「うちまで迎えに来るって言ってたけど、もう寝てるし、今日は土曜だから起きたら俺が送るって言ったら諦めた」
「よかったぁ……」
百花がホッと胸を撫で下ろすと、拓哉の過保護っぷりを知っている透がクスクスと笑いを漏らした。
「モモ、今日の予定は？」
「今日は家の中を掃除しようと思ってたんだよね。明日はブライダルフェアの手伝いで出勤だから」

百花の実家、榊原家は両親と兄、百花の四人家族だ。
両親は最近話題のフルーツタルトのチェーン店『タルト・オ・フリュイ』を経営していて、兄の拓哉はパティシエ兼開発チームのリーダーでもある。
今でこそ法人化してかなり規模が大きくなっているが、百花が子どもの頃は、まだ街の小さな洋菓子店だった。さして裕福でもなく、ご近所でも「ケーキ屋のモモちゃん」と呼ばれるような、ごく普通の家庭だったのだ。
ところが百花が中学校に入る頃には大ブームとなり、テレビや雑誌で大きく紹介されるようになった。あれよあれよという間に首都圏に店舗を増やし、今はかなりの規模の会社になっている。
そうなると自然と生活のレベルも上がり、高校に入る頃にはこれまでの店舗兼自宅から、都心部の庭付き一戸建てになった。百花は社会人になった今もそこで家族と暮らしているのだ。
「掃除って、家政婦さんにお願いしてるんじゃないの？」
透の言う通り、両親が経営陣に参加しているために家事をする人がおらず、通いの家政婦さんをお願いしている。それはとても助かるのだが、やはり休みの日ぐらい自分でできることはしたいのだ。
「でも毎日じゃないし、自分たちの部屋はお願いしてないから。それに今の家に引っ越

すまでは、家のことはだいたい自分でやってたんだもん」
そう、両親が二人で店をやっていた頃は、家の掃除や洗濯、夕飯の支度も百花の担当で、その頃のクセは今も抜けない。動いているほうが性に合うのだ。
「モモは偉いな。俺、モモのそういう堅実なところ好きだな」
透の思いがけない言葉に驚いたが、それでも透のような大人の男性に言われるとドキリとする。
「もう！　何それ。堅実なんて女の子に言う褒め言葉じゃないし」
「そう？　結婚するなら重要な条件だと思うけど」
「何それ。透くん、そういう子が好みなの？」
独身を謳歌し仕事に打ち込んでいる透がそんなことを言うのがおかしくて、百花はクスクスと笑いを漏らした。
「さてと、支度して帰ろうかな」
ひとしきり笑ってベッドから滑り下りようとした百花の手首を透の手が掴む。
「どうしたの？」
訝るように振り返った百花に、透が柔らかな笑みを向けた。
「待って。実はモモに渡したいものがあるんだ」
「……何？」

「見てのお楽しみ」
透は楽しげに唇の両端を吊り上げると寝室を出て行き、すぐに何か小さな包みを手に戻ってきた。
「はい、どうぞ」
そう言って差し出された透の手には、ピンクのリボンがかかった白い箱が載せられていて、百花は首を傾げた。
誕生日はもう過ぎたし、その時にちゃんとプレゼントをもらっている。もう社会人なのだからと、百花のお給料では簡単に手が届かないハイブランドのお財布をもらったのだ。クリスマスもまだかなり先だし、このタイミングでプレゼントをもらうような理由がなかった。
考えても思い当たることがなく手に取るのを躊躇っていると、押しつけるように手渡されてしまう。
「なあに？　これ」
「開けてみて」
首を傾げながら包みをほどくと、箱の中からはさらにクリスタルのジュエリーケースが現れた。そう、ちょうど特別なアクセサリーが入るデザインに百花の心臓が大きく跳ねた。

「これって、もしかして……」
恐る恐る蓋を開けると、中にはダイヤモンドを中心に据えたデザインリングが入っていて、石の大きさから見ても、ただの指輪でないことはすぐにわかった。
「透くん……これって……」
「うん、婚約指輪」
「……えっ!?」
透はケースの中から指輪を取り出すと、驚きすぎて言葉もない百花の左手の薬指にそれをはめてしまった。
「あの、えっと……」
「昨日のモモを見て思ったんだ。そろそろ婚約者の権利を主張しておこうって」
「は？　き、昨日の私って」
「男の前で無防備に酔っ払ってただろ」
「お、男って言っても会社の先輩だし、女の人もいたし！」
というか、ウエディング事業部の広報室は女性の方が多い。そもそも、どこの部にだって男性社員がいるのだから、男の前で酔っ払ったというのは言いがかりに近い気がする。
それに婚約者の権利とはどういう意味だろう。今まで一度もそんなことを言ったこと

などなかったのに。

「とにかく、俺は心配になったんだ。婚約してもう六年だし、そろそろ今後のこともちゃんとした方がいいだろ。だからこれは俺の意思表示ってところかな」

透はそう言うと、百花の左手を引き寄せ、指先にチュッと音を立てて口づけた。

「……っ！」

「モモももう大人だし、これからはもっと積極的にアプローチをしていくつもりだから覚悟してて」

これまでずっと兄のように慕っていた透に突然甘やかな眼差しで見つめられて、心臓がおかしなリズムで動き出す。思考回路はぐちゃぐちゃだ。

百花はまだ夢を見ているのではないかと思わず自分の頬をつねってしまう。

「いたっ」

確かに感じる痛みに声を上げると、一連の仕草を見ていた透が噴き出した。

「やっぱりモモは可愛いな」

「……な！」

いつもの透とは違う甘い言葉に、百花は一瞬言葉を失った。

「き、今日の透くん、なんか変。もしかして具合が悪いとか……あ！　寝ぼけてるんじゃない？」

きっとそうだ。自分が夢を見ているのではなく、透が寝ぼけているのだ。しかし透はあっさりと首を横に振る。

「そんなことない。モモを抱いて眠れたからとっても寝覚めもよかったし、むしろいつもよりいい気分」

「抱いてって……」

物理的にはそうだが、自分から抱かれたつもりはない。

「そんなに恥ずかしがることじゃないだろ。子どもの頃はよく一緒に寝てたし、お風呂だって一緒に入ってたし」

「それはホントに小さいときで、大人になってからは一度もないし！」

「じゃあこれから試してみる？」

ニヤリと笑った透の顔を見て、百花はギョッとしてベッドの上から飛び下りた。

「ひどいな。そんなにあからさまに嫌がらなくたっていいだろ」

「透くんが変なことを言うから！」

「変なことじゃない。婚約者としての権利の主張。モモも俺たちのこれからをちゃんと考えてみて」

――当然の権利？　親同士が口約束で決めた話の上に、上辺（うわべ）だけ婚約者のふりをするという約束に権利などあるはずがないのに。

百花は透の突然の豹変に戸惑いながら、彼の婚約者になった経緯を思い出していた。

1

透の突然の宣言に衝撃を受けた百花は、まだ状況がよく飲み込めないまま透に連れられてカフェでブランチをとってから、昼過ぎに自宅まで送り届けられた。

食事のときも車で家まで送ってもらうときも、いつもの優しい幼馴染(おさななじ)みの透くんで、それ以上婚約云々のことは口にしなかった。

やっぱり自分は寝ぼけていたのかもしれない。お酒の飲み過ぎはよくないとしみじみと反省しながら車を降りようとしたときだった。

「モモ、指輪なくすなよ」

「えっ」

その言葉に自分の薬指に燦然(さんぜん)と煌めく指輪を見て、現実逃避をするのを諦めた。

「それ俺の中のモモのイメージでオーダーしてもらった一点ものだから」

そう言われて百花はこっくりと頷(うなず)くことしかできず、複雑な表情のまま透の車を見送った。

そもそも透が口にした『婚約者の権利』自体に問題がある。

六年前に二人の間、というか神宮寺家と榊原家の間で結婚の約束が交(か)わされたのは事実だが、あくまでもそれは口約束で、百花は透に頼まれて婚約者役を引き受けただけなのだ。

透との婚約話が出たとき、透は二十六歳、百花は十七歳でまだ高校生だった。

その頃、百花の両親の店はブームに乗って続々と新店舗を出しているときで、神宮寺家に多額の出資をしてもらったらしい。

そんな経緯で神宮寺家からの申し出もあり、両親から二人の婚約を提案された。最初は冗談だと笑い飛ばしていたのだが、その後しばらくして透に呼び出された。

「親父たちが言ってた俺たちの婚約の話なんだけど、モモ、本気で考えてみてくれない？」

「ええっ!?」

学校帰りに透と待ち合わせをした百花は制服姿で、表参道(おもてさんどう)のお洒落(しゃれ)なカフェに入ってフルーツパフェを食べていた。

最近流行の店で、何かの折に百花が食べたいと言っていたのを覚えていて、透が連れて来てくれたのだ。

それなのにいきなり想定外の提案をされて、百花はここが表参道のお洒落(しゃれ)カフェであ

ることも忘れて大きな声を上げてしまった。

静かなピアノ曲が流れる店内で女子高生など一人もいない。百花は慌てて口を両手で押さえて、居たたまれなさに肩を竦めた。

「ごめんごめん。驚かせちゃったな。婚約って言っても、俺と婚約したふりをしてほしいってことなんだけどさ」

透の提案に、百花は目を丸くした。

高校生の百花から見れば透は立派な大人で、しかもいわゆるイケメンの部類に入る自慢の幼馴染みだ。そんな彼がわざわざ高校生の自分に偽装結婚を頼むのは不自然だろう。

「ふりって……透くん彼女いたよね？」

百花はそう言いながら、再びスプーンでパフェを口に運ぶ作業を再開する。

最近はわからないが、高校生や大学生のときは兄とそんな話をしていたのを耳にした記憶がある。もし婚約したふりをするにしても、そういう彼に近い年代の女性の方が信憑性もあるだろう。間違ってもパフェを頬張る女子高生に務まるとは思えない。

「うーん。最近はいないかな。それに嘘の婚約がしたいのに本物の彼女に頼んだら、すぐに結婚しなくちゃいけなくなるだろ」

「え？　どういうこと……？」

本物の彼女との結婚の何が悪いのだろう。普通は好きで一緒にいたいからお付き合いをするわけで、結婚しないのに婚約者のふりをするよりよっぽど建設的だ。

聞けば聞くほどわからなくなり顔を顰めた百花を見て、透はクスクスと笑いを漏らす。

「わかりやすく言うと、俺はまだ結婚したくないんだ。まだ社会に出たばかりの半人前だし、今は仕事に集中していたい。でも父も祖父も会社のことがあるから早く結婚しろってうるさくてさ。それで、高校生のモモとの婚約だけしておけばすぐに結婚式ってことにはならないと思ってね。父も昔から娘みたいにモモのことを可愛がってるから、婚約の話が出たんだと思うんだ」

確かに百花の両親も透を気に入っているし、二人が婚約すれば大喜びすることは間違いない。透の言う通り、高校生の自分が相手ならすぐに結婚と急かされることもないし、家族同士で許嫁だと決めておけばそれだけで満足しそうだ。

透は十歳の時に母親を病気で亡くしている。百花は生まれたばかりで透の母のことは記憶にないが、とても綺麗な人だったらしい。当時、神宮寺家はすでに祖母も他界しており、祖父と父だけの男所帯の中で育つ透を心配して、百花の母が頻繁に家に招くようになった。

兄と同い年だったこともあり、物心がついた時から榊原家に出入りしていた透は、百花にとってもう一人の兄のようなものだった。

「モモは大学にも進学するだろ？　その間親にもうるさく言われないし、俺も仕事に集

中できる。ね？　モモには迷惑かけないって約束する。とりあえず口約束だから、お互いの家族の間だけで婚約者ってことにしておいてくれればいい」

「……でも」

そんなに簡単にいくだろうか。百花の疑問に透は笑って首を横に振る。

「大丈夫。会社同士の繋がりの政略結婚みたいなものだし、親父たちはモモのこと可愛がってるから形だけでも満足するしさ。それにすぐ結婚するわけじゃないし、婚約だけなら友達に話す必要もないから、モモの生活は何も変わらないよ」

透には子どもの頃から可愛がってもらっているし、時折食事や遊びにも連れ出してもらっているから、できれば役に立ってあげたいところだ。それで透の父や両親が安心してくれるなら嬉しいし、婚約者のふりといっても、相手が透ならちょっとした優越感も覚えてしまう。

百花はそれ以上あまり考えもせず、透の提案に頷いていた。

「わかった。透くんが困ってるなら協力する」

「ホント？　モモ、ありがとう！」

喜んだ透に両手をギュッと握りしめられたときはドキリとしたが、二人の間にこの六年間それ以上の接触はない。

一応順調な付き合いをしているという態でたまに一緒に食事や映画に出かけたりはするが、透とは婚約をする前から一緒に遊びに行くのが普通だったから、百花の生活に大きな変化はなかった。

もちろん普通の婚約ではないから男女の特別な関係などないし、むしろ透がしっかり見てくれているだろうという安心からなのか、両親は百花の友人との交際関係に口うるさくなくなった。兄の拓哉が門限だのなんだのと騒ぐのを宥める側に回ったくれたほどだ。

百花は薬指にはまったままの、透曰くの「婚約指輪」を見つめた。

プラチナの台座の真ん中には大きなダイヤモンド。そしてそのダイヤを挟むように薄いブルーの石が二つ添えられた可愛らしいデザインだ。

百花が三月生まれだから、薄いブルーはアクアマリンだろう。透はそういう細かいことに拘るロマンチストなのだ。

別れ際に百花のイメージでオーダーしたと言っていたが、いつからこの指輪を用意していたのだろう。オーダーなら時間もかかるし、昨夜思い立ってすぐというわけにはいかない。

透は一体いつから自分のことをそういう目で見るようになったのだろう。というか、婚約者の権利とは何なのか。そもそも嘘の婚約に権利などあるのだろうか？

しかし、冗談でこんなに立派な指輪を用意するはずはないと思えて、百花は透の言葉

の意味を真剣に考えるしかなかった。

すると急に兄のような存在だった透が家族の枠から外れて、一人の男性に見えてきてドキドキしてしまう。

透は昔から格好よかったし、社内では女子社員にも人気がある。そのうえ仕事もできて社長の息子、御曹司とくればモテないはずがない。

そんな彼とすでに婚約しているのだから、婚約者の権利など主張されたら次に来るのは結婚だ。

手を繋いだのなんて婚約が決まったときだけで、それ以上の身体的接触はない。そんな関係で結婚なんてできるのかわからないというのが本音だ。

こうして透のことばかり考えていると、何だか胸が苦しくなってくる。

それは嬉しくて胸が高鳴るというよりは、これから何が変わっていくのかがわからず、不安で胸がキュッと締めつけられる感じだ。

そういえばこんなに素敵な指輪をもらったのにお礼も言っていないことに気づく。

百花は改めて薬指の指輪を見つめて、さすがに会社にはしていけないな、と意外にも冷静に考えている自分に驚いた。

翌日の日曜日はブライダルフェアの手伝いで忙しく過ごし、さらに翌日の月曜日も通

常通りに出社をした。

透にいきなり婚約指輪を渡されてどうすればいいのか悩んでいたが、あれ以来透から返事を促されることもなく、いつもの日常が始まっていた。

百花が働くウエディング事業部広報室は本社の一角にある女性中心の職場で、名前の通り自社の宣伝が業務の中心だ。打ち合わせやフェアのときは式場に出向くが、普段はオフィス業務がメインとなる。

テレビや雑誌の取材を受けたり、広告代理店を通じてイベントを企画したり、ウエディングフェアの助っ人にも行くマルチな職場だ。

「おはようございます！」

百花がオフィスに入っていくと、すでに出社していた数人が挨拶を返してくれる。

「百花ちゃん、おはよう。昨日はご苦労様」

隣のデスクからにっこり笑いかけてきたのは先輩の大場翠（おおばみどり）で、左の薬指には結婚指輪が光っている。女性の多い職場ということもあり、先輩には既婚女性が多く、出産後に職場復帰する人がほとんどだ。

「昨日はお子さんの保育園の運動会どうでした？　お天気が良くてよかったですね～」

「フェアの日なのにお休みいただいてごめんね。久しぶりにじーじとばーばに会えて、娘も嬉しそうだったわ。それより当日ご成約数はどうだった？　百花ちゃんの初企画

だったから、もう気になって気になって」

翠の言葉に、百花はぺこりと頭を下げた。

「ありがとうございます。おかげさまで目標数達成できました！」

「やったじゃん！　大丈夫だとは思ってたけど、やっぱり目標達成は嬉しいわよね」

「翠さんが過去のご来場者様でご成約いただいていない方に積極的にご案内を送ってくれたからです。ありがとうございました！」

ブライダルフェアはすでにご成約のお客様にプランを見ていただく以外にも、フリーの来場者から当日成約や次回の相談予約をいかに取るかが大切で、広報はフェアのたびに色々な提案を行っている。

今回は百花が初めて企画したアフタヌーンティーが目玉になっていて、翠はそれを心配してくれていたらしい。

企画は平日の式の予約がない時間帯に、式場をアフタヌーンティーに開放するというものだった。

アフタヌーンティーなら結婚の予定がない一般のお客様でも足を運んでくれるし、式場内は写真映えするスポットが多いから、自由に撮影してＳＮＳで紹介してもらえれば式場としての認知も高まる。

今回は、当日ご成約のお客様にはペアでアフタヌーンティーにご招待という特典を用

意したのだ。

ＳＮＳで話題になり始めていたこともあり特典は好評で、式場のスタッフからも季節ごとにアフタヌーンティーのイベントをやってはどうかなど、積極的な提案も出たほどだった。

「これからどんどん次の企画を仕込んでいかないとね。アフタヌーンティーはグルメ系雑誌からの取材申し込みもきてるし、上も推してくれると思うよ」

勤続十年の翠がそう言ってくれるなら安心だ。

「そうだ。百花ちゃん頑張り屋だから、関西のニューオープンのスタッフに応募してみたら？」

「何ですか、それ？」

初めて聞く話に、百花は首を傾げた。

「さっき社内メールで回ってきてたんだけど、いよいよ我が社も本格的に関西に進出だから気合い入ってるのね」

翠の言葉に、百花はパソコンの電源を入れてメールチェックをする。件のメールはすぐに見つかり、百花はざっと内容に目を通した。

これまでウエディング事業は首都圏でしか展開されていなかったのだが、今回満を持して関西方面に進出するという話は去年から聞いていた。

メールでは、そのオープニングスタッフとして三ヶ月から半年現地へ行くメンバーを募っていて、社歴や年齢問わず応募してほしいという内容だった。

しかも本人が希望すればそのまま関西のスタッフとして働くことも可能で、そうなれば現地で重要なポジションが約束されたようなものだ。

社員の中に、できれば地元で就職したかったという人もいるから、関西に異動を機に地元で働けると喜ぶ人がいるかもしれない。期間限定の勤務も選べるのなら、誰にとっても興味深い仕事だろう。

その後の朝礼でも上司から同じ話があり、勉強にもなるから若手もどんどん応募してほしいとのことで、広報室からも人員を出したいので百花も応募を勧められた。

入社二年目にしてやっと仕事が面白いと思えるようになってきた百花は、一から自分たちの手で式場作りに携わることができるのはやりがいがあると思った。

ただ異動になった場合長期出張扱いになるから、実家の両親はともかく兄は寂しがりそうだと思いつつ、応募要項をプリントアウトした。

そのあとは通常業務で、その日の午前中はフェアで回収したアンケートの整理で終わってしまった。

以前は式場スタッフがアンケートのまとめを作成していたのだが、日々の作業が多い現場スタッフだとアンケート整理になかなか時間が割けずフィードバックが遅くなるので、ここ数年は広報室がデータ化して共有することになっている。

一般的な項目の集計をグラフ化し、目新しい意見やお客様の要望を抜き出して資料を作り、今後のフェアの参考にするのだ。

お昼になり翠と外でランチを取って戻ってくると、いつもならこんなところにいない人が広報室の入口に立っていた。

先に気づいたのは翠で、「専務、お疲れさまです」という声に、百花はやっと透の姿に気づきドキリとして足を止めてしまった。

一昨日の昼に家に送ってもらってから、透とは連絡を取っていない。まさかこんなところで顔を合わせると思っていなかった百花は、心の準備ができておらずその場で固まってしまう。

「百花ちゃん？」

隣を歩いていた翠が訝るように振り返ったけれど、百花の動揺には気づいていないのか、

「先に行ってるね」

そう言ってから透に会釈をしてオフィスに入っていった。

二人が子どもの頃から一緒に過ごした幼馴染みなのは社内でも知られているので、こんなところで透が待っていても不思議には思わなかったらしい。

「モモ」

名前を呼ばれただけで心臓が跳ねる。頭の中に、一気に一昨日の朝のことが押し寄せてきてどんな顔をすればいいのかわからなかった。

「指輪、してないんだ」

透の言葉にギョッとする。もしかして透はそれを確認しに来たのだろうか。

「あ……っ」

悪いことをしているわけでもないのに左手をサッと背中に隠すと、頭上で透がクスリと笑いを漏らした。

「冗談。さすがにまだ会社にはして来られないだろ。わかってる」

からかわれたのだとわかりホッとしたけれど、一瞬透の目にがっかりしたような光が浮かんだので、何だか良心が咎めてしまったのだ。

「……もう」

唇を尖らせ上目遣いで睨むと、透がさらに笑みを深くした。

「でも、モモがこうやって罪悪感を持ってくれたのなら、指輪を渡してよかったかも」

どういう意味だろう。問うような百花の視線には答えず、透はさらりと話題を変えた。

「モモ、明日の夜は時間取れる？」

「あ、うん」

「久しぶりに一緒に食事に行こう。前にモモが行きたいって言ってたイギリスのマナーハウスみたいなレストラン。あそこの予約が取れたんだ」

「ホント!?」

透と会うのが気まずいと思っていたことも忘れて誘いに飛びついてしまう。

東京の郊外にあるレストランなのだがウエディングにも利用できるそうで、仕事の参考にもなるので一度行ってみたいと透に話したことがある。まさか覚えていてわざわざ予約を取ってくれるとは思わなかった。

「夕方車を頼んでおくから一緒に行こう」

「うん！」

百花が力一杯頷くと、透はなぜかホッとしたように溜息を漏らした。

「……どうしたの？」

「ん？　勝手に予約しちゃったから、断られたらどうしようかと思ってたんだ。だから良かったっていう溜息」

「……な、何それ」

とっさに茶化すように笑ったけれど、透の言葉一つひとつが、まるで蜂蜜のように甘く聞こえるのはなぜだろう。今まで何度食事に誘われても、こんなふうに感じたことなんてなかったのに。

この面映ゆいような、くすぐったい気持ちはなんなのだろう。

「わ、わざわざ言いに来てくれなくても、アプリでメッセージ送ってくれればよかったのに」

素っ気ない返事なのに、透は唇を優しく緩める。

「俺がモモの顔を見たいから来たの。じゃあね」

そう言うと手を伸ばして百花の頭を優しく撫でた。

「午後も頑張って」

わずかに前屈みになり、百花の瞳の中を覗き込み、形のいい唇が甘いカーブを描く。

そんなふうに見つめられるのは初めてで、百花はカッと頭に血が上るのを感じてギュッと目を瞑ってしまう。

「……っ」

次に目を開いたとき、透はすでに背を向けて歩き出していて、百花はその背中が廊下の角を曲がるまでただ見つめ続けることしかできなかった。

やっぱりいつもの透じゃない。優しいのはいつも通りだが、言葉の一つひとつに甘さが滲んでいて、その声を聞くと背中がざわりとして落ち着かない気持ちになる。

これが透の本気の婚約者モードだというのなら、身が持ちそうにない。

これまでも優しくしてもらったし、甘やかされてきた自覚もある。でも本気宣言の後からの透は何かが違うのだ。身の危険を感じると言ったら透は怒るだろうか。

その感想はあながち間違っていなかったと気づくのは、それほど先のことではなかった。

＊＊＊

お目当てのレストランは東京の郊外、武蔵野エリアに位置していて、都心からなら車で一時間もかからない。都心に近いのに自然豊かで大きな公園も多く、そのレストランも公園のような広い敷地の奥に隠れていた。

イギリスのマナーハウス、つまり貴族の邸宅を模したレストランで、最近人気のカジュアルなレストランウエディングやガーデンウエディングに対応していて、テレビやSNSで取り上げられ注目が集まっていた。

百花は店の前で車を降りると、優美な建物を見上げて溜息を吐いた。

「素敵。ここだけイギリスみたい」

大学生のとき三週間ほど語学研修でイギリスに行ったときに目にした郊外のホテルを思い出すような建物だ。ここまで本格的なら、海外ウエディングの雰囲気で挙式することもできそうだった。

「資料用に写真とか撮ってもいいのかな？」
思わずそう口にすると、透が小さく笑う。
「仕事熱心だね。店を下見に来たカップルって設定ならお店の人も喜んで対応してくれると思うよ」
「えっ」
確かにカップルだが、改めて言われると急に恥ずかしくなる。
「婚約してるんだから嘘をつくわけじゃないだろ。まあここで結婚式となったら周りがうるさそうだけどね。モモがここで式を挙げたいって言うなら、俺が親父を説得するけど」
「……べ、別にここじゃなくても……」
冗談なのか本気なのかわからない口調に、百花はモゴモゴと口の中で呟いた。
これまで透と結婚式をするなど考えたことがなかったが、自社でウエディング事業に力を入れているのだから、今後のことも考えればその施設で盛大にやるのが普通だろう。
透と結婚することが公になれば仕事がしづらくなりそうだ。というか、結婚したら仕事は辞めなくてはいけないのだろうか。
「モモはどんな結婚式がいいの？　ウエディングの仕事をしてたら、こだわりも出てくるんじゃない？」

今すぐにでも結婚式の打ち合わせが始まりそうな雰囲気に、百花が言葉を詰まらせたときだった。
「ようこそいらっしゃいました」
タイミングよくかけられた店員の出迎えの声に遮られて、ありがたいことに返事はうやむやになる。百花は内心ホッと胸を撫で下ろした。
案内されたのは個室で、初めての来店だと知るとスタッフがあれこれと店の説明をしてくれる。昼はランチタイム以外に英国式アフタヌーンティーも行っているそうで、自分の企画と重なる部分があり、是非、昼の時間帯にも来店してみたいと思った。
後でＳＮＳを検索してどれぐらい注目されているかチェックしてみよう。オーダーを終え店員が部屋を出て行くのを見送りながら、そんなことを考える。
「そういえば、今展開している広報の企画もアフタヌーンティーだったね。あれってモモの企画なんだって？」
透の言葉に目を丸くする。
「え？　知ってたの？」
「もちろん。顧客獲得にも繋がっているし、評判がいいって情報も上がってきてるよ。ＳＮＳでもかなり投稿が増えていて、注目されてるって聞いた」
その言葉を聞き嬉しくなる。翠や上司からはいい企画だと褒められていたけれど、透

のところまで話が届いているのなら、お世辞ではなかったということだ。
「あのね、今回のアフタヌーンティーはSNS映えにこだわったの！　レストランスタッフと何度も試食会をしたり、撮影をしたり大変だったんだ」
「うん」
「日曜日のブライダルフェアで当日のご成約特典にアフタヌーンティーのご招待をつけたから、きっとまたそのお客様たちがSNSで紹介してくれると思うんだよね。季節によってメニューも変えたいし、モニターを募集して試食会をしてもいいかも」
「じゃあ他のアフタヌーンティーも参考のために見にいった方がいいね。モモが行きたいお店に一緒に行こうか」
「本当!?　行きたい！」
褒められたことが嬉しくてつい饒舌になったけれど、透がニコニコしながら耳を傾けてくれるから、もっと聞いてほしいと思ってしまう。
考えてみればかなり年が離れていることもあり、子どもの頃からこうして話をするのはいつも百花で、透はもっぱら聞き役だった。
おしゃべりの間に料理が順番に運ばれてきて、前菜にはイギリスの代表的なオードブルの盛り合わせ、スープに冷製サラダ、メインはビーフウェリントンという牛フィレ肉のパイ包みと、話をしながら次々に平らげていく。

昨日食事に誘われたときは婚約のことや指輪のことが気になって不安だったけれど、いつの間にかいつも通りの二人に戻った気がしてホッとする。
これぐらいの距離感が自分たちにはちょうどよかったと思うのに、透はそうではないのだろうか。
上目遣いで様子を窺うと、百花の視線に気づいて透が眉を上げた。
「美味しくない？」
「ううん。お、美味しい。イギリス風のレストランってあまり行ったことないし」
そう美味しい料理を楽しめばいい。せっかくいつもの調子に戻ったと思っていたのに、気づくと透のことを意識している自分がいるのだ。
「何か言いたそうだね。言ってごらん」
もう一度問いかけられて、百花は思いきって口を開いた。
「あの、今日って……デートなのかなって」
口にしてみるとなんだかくだらないことを尋ねてしまった気がして、自然と頬が熱くなる。
「なるほど。モモは一応俺のこと意識してくれてるんだ」
「ちが……」
「そしてデートの気分を味わっている、と」

「違うってば！」

透が嬉しそうに微笑むのを見て、さらに恥ずかしくなる。まるで子どもの成長を喜ぶ父親みたいな顔だ。

そこに店員がデザートを運んでくる。生クリームがたっぷり添えられたチョコレートケーキにはナッツやドライフルーツがたっぷり入っていて、一瞬ワクワクしたがすぐに先ほどの緊張感が戻ってくる。

すると透が苦笑いを漏らした。

「そんなに緊張しなくていいよ。さっきまでいい感じで仕事の話をしてただろ。いつもの食事と一緒だよ」

「そうだけど……」

「まあモモが俺を男として見てくれているのは嬉しいけどね。今まではどう頑張っても拓哉と同じ兄貴ポジションだったから、そんなにすぐにモモの意識が変わるとは思ってない」

そうなのだ。兄のように慕っていた人をいきなり結婚相手として見ることに無理がある。というかどうしても戸惑ってしまうのだ。

透のことは大好きだし、男性としても格好良いと思う。でもそれが恋とか愛かと聞かれるとよくわからなかった。

「……今まで通りじゃだめなの？」

思わずそう口にしてしまったが、透は曖昧な笑みを浮かべただけで話題を変えてしまう。

「ほら、モモ、チョコレートケーキ好きだろ。食べな」

「……う、うん」

「帰りは少し歩こうか。いつもなら店にタクシーを呼んでもらうところだけど、せっかくだから大通りまで散歩するのも悪くないだろ」

デザートと食後の紅茶をいただいて店を出ると、透が腕を伸ばし百花の小さな手を自分の手の中に収めてしまった。

自分の体温なのか、それとも透の体温なのかわからないが、キュッと握りしめられた手は少し熱い。

二人で手を繋いだことなんて子どもの頃から何度もあるのに、今日は今までとは違う不思議な揉ったさがある。いっそ振りほどいてしまえばいいのに、それをしてはもったいないような気がするのは、自分の感情がおかしくなっているとしか思えなかった。

来るときは車だったので気づかなかったが、店の敷地は大きな公園に隣接していて、大通りまでは公園を抜けていけば近道だという。

土地勘のない百花は、外灯に照らされた遊歩道を透に手を引かれながら歩くしかな

かった。

「そういえば、ウエディング事業部、大阪のオープニングスタッフの募集始めただろ。モモは応募するの？」

夜の公園の雰囲気に飲まれていた百花は、いつもの声音で仕事の話を振られホッとして頷いた。

「うーん、考え中なんだよね。上司や先輩には応募したらって勧められてるんだけど、半年も東京を離れるとなるとお兄ちゃんが寂しがるかなって」

「ははは。でも拓哉は寂しくなったら、大阪まで会いに行くだろ」

「……た、たしかに」

兄ならやりかねない。百花が思わず顔を顰めると、透が繋いでいた手にギュッと力を込めて立ち止まった。

「ちなみに」

誘われるように見上げると、瞳の中をジッと覗き込まれる。

「俺も寂しい」

「……っ」

たったそれだけの言葉なのに、重なった視線から色々なものが流れ込んでくるようで胸が苦しい。この瞬間、本当に透が自分と結婚しようとしていることを感じてしまった。

でも自分の心はまだ決まっていない。透は予め指輪を用意するぐらい前から考えてくれていたと言うが、百花が透の本気を知らされたのはつい先日なのだ。

「モモ」

心臓がどうしようもなく騒いでいて、名前を呼ばれるだけで息ができなくなる。顔が火照って、何と答えればいいのかわからなかった。

「も、もぉ！　そういう……思わせぶりな目で見ないで！」

照れ隠しに早口で言うと、これ以上赤い顔を見られたくなくてプイッと顔を背ける。

「モモにはそう見えるんだ？」

嬉しそうな透の声がして、その笑いを含んだ声音を聞けば、百花が彼を意識していることに気づかれているのが伝わってくる。

「モモが少しでも俺のことを意識してくれているなら嬉しいんだけどな」

「い、意識なんてしてない、もん……っ」

俯いたまま否定すると、透はクスクスと笑いながら大きな手で百花の頭を撫でた。

「でもまあ、モモが本当に行きたいのならチャレンジしてみたら？」

意外な言葉に、百花は恥ずかしがっていたことも忘れて顔を上げた。

「え？　いいの？」

もしかしたら婚約のことがあるから反対されるのではないかと思っていたのだ。

「だって、モモは今が一番仕事が楽しいときだろ。色々経験してみるのはいいことだと思うよ」
「う、うん」
「あ。もしかして俺が反対すると思った？」
その通りなので素直に頷いた。さっき寂しいと言われたとき、ドキリとしたあとに嬉しいとも思ってしまったのだ。
家族以外で自分がいないと寂しいと思ってくれる人がいるのは幸せだ。その人の一部になれたような気がする。
「六年も待ったんだから、俺は焦るつもりはないよ。まあなるべく早くモモにも結婚のことを考えてほしいけど、モモはまだ若いしやりたいこともあるだろ」
理解のある婚約者を演じようとしているわけではないだろうが、こんなふうに女性の仕事に理解がある男性は珍しい気がする。いくら男女平等とか今は共働きが当たり前だと言われていても、実際に結婚したら女性の方が男性の仕事に合わせるケースが多いし、転勤など相手の仕事の都合に振り回されるのも、まだまだ女性の方が圧倒的に多いと聞く。
もしかしたらその言葉だけでも、世の女性が飛びついてしまいそうな好条件の相手なのではないだろうか。

透の理解ある言葉に一瞬喜んでしまったが、すぐにそれよりももう一つの言葉の方が気になって口を開いた。
「あの……六年って……婚約した頃から、ってこと？」
当時の自分は高校生だ。もう社会人だった透がそんな子ども相手に本気で結婚を考えていたなんて信じられなかったが、透はあっさりと頷いた。
「そう。本当は将来的にモモと結婚できるなら理由なんて何でも良かったんだけど、俺も周りがうるさくなってたからね。それに気持ち悪いと思わないでほしいんだけど、俺にとっては小さいときからずっとモモが一番可愛かったし、モモより大事な女の子なんていなかったんだ。だから自然と結婚のことも考えるようになってた」
この六年間、そんな素振りなど一切見せなかった透の言葉に驚きすぎて嬉しいというより呆然としてしまう。
しかもいつもスマートで社会的にも地位があり女性にもモテる透が、こんなにも一途なタイプだなんて信じられない。
今まで何も考えず無邪気に透と過ごしてきたのに、そんな目で見られていたのかと思うと恥ずかしくてどうしていいのかわからなくなる。
わがままもたくさん言ったし、もっと幼い頃は兄にするように透に子どもっぽい八つ当たりだって何度もしたことがある。そんな自分のどこを見て好きになってくれたのだ

ろうか。

ふと透の年齢と子どもの頃の記憶を思い出し、百花はわずかに眉を顰めた。

「でも……透くんって、付き合ってた女の子とかいたよ……ね？」

百花が小さい頃、つまり透が高校生や大学生の頃は付き合っている彼女の話を耳にしたことがある。九歳も離れているのだから当然というか、むしろそんな小さい頃からと言われたら怖いが、何にしろ透には女性との交際経験があるはずだ。

責めるのではなく確認のつもりで口にしたのだが、透はなぜかばつの悪そうな顔をした。

「あー……んー……でも、モモと婚約をしてからは誰とも付き合ってない。モモ一筋だって誓う！」

「べ、別に誓ってくれなくても」

「いや、絶対モモだけだから。モモは信用してないみたいだけど、俺一途だからモモのことめちゃくちゃ可愛がるし大事にする。疑うなら証明してみせようか」

透はそう言うと、繋いだ手を引っぱってもう一方の手で百花の腰を引き寄せてしまう。

「な、何!?　いきなり」

「そんなに驚かないでよ。仕事でも色々経験してほしいけど、モモにはもう少し婚約者っぽいことも体験してもらわないとね。俺にこうされるのは嫌？」

「い、嫌じゃないけど……なんかドキドキする……」

ここできっぱり嫌と言えないのが百花で、そのまま近くのベンチに座らされてしまった。

「今日は指輪つけてきてくれたんだな」

透は百花の手を握り、指先で薬指の指輪をなぞる。触れられているのは指なのに背筋がゾクリとして小さく身体を震わせてしまう。とっさに手を引き抜こうとしたけれど、逆に指を絡ませられ恋人繋ぎにされてしまった。

夜の公園は外灯の明かりがあると言っても薄暗く、何となく後ろめたくなるような空気だ。

「すごく似合ってる」

「……ありがとう。オ、オフィスではできないから……今日ぐらいと思って」

やはりもらったものをしまっておくのも失礼だし、昨日一瞬でも透のがっかりした顔を見てしまったから、二人で食事をするときぐらいならかまわないだろうと思ったのだ。でも、これでは結婚を受け入れたことになってしまうのではと急に心配になる。

「そういえば、指輪のこと誰かに話した？」

「え？　友達にってこと？」

「違うよ。おじさんやおばさんに俺から指輪をもらったって話したのかなって」

「……まだだけど」

自分でも状況がよく飲み込めていないのに、誰かに話してしまったら、誤解を生みそうだ。でも家同士の付き合いを考えたらいずれは両親に話さなければいけない。透もそのことを心配しているのだろう。

「……言った方がよかった？」

「別にいいよ。焦るつもりはないって言っただろ。モモが報告したいタイミングまで待ってる」

「う、うん」

透が百花の気持ちが固まるのを待ってくれているのは嬉しいが、やはりこうして透と指を絡ませ合うのはムズムズとして落ち着かない。

「少しずつ恋人らしいことも試していこう」

「恋人らしいこと？」

「そう。こうやって二人で食事に行ったり散歩するなんて、今までとあまり変わらないだろ。だからもう少し恋人らしいことを試してみたくない？」

「も、もぉ……手、繋いでるし」

相変わらず恋人繋ぎでギュッと握られたままの手を見下ろすと、透が小さく笑う気配がした。

「じゃあ俺に抱きしめられたりするのは？　嫌？」

さっきと同じ質問の仕方だ。百花が嫌だとは言えないような言い方をするなんてずるい。

「そ、そんなことはないけど……」

そう返すしかないが、透に抱きしめられる自分なんて想像できない。

「じゃあちょっとだけ試してみようか」

――ちょっとだけって、どういうこと？　思わずそう聞き返してしまいそうになった百花の前で、透は繋いでいた手をほどき、百花の方に身体を向け両腕を開いた。

「モモ、おいで」

「は……？　い、今!?」

「うん、今。こういうのは思い立ったときに試さないと」

思い立ったのは透であって百花ではない。それなのに百花から抱きしめられに行かないといけないのはおかしい。しかし目の前で腕を広げられていたら急かされているようで、そうしなければいけないような気持ちになってしまう。

「し、失礼します……」

ボソボソと呟き、俯いたまま透の胸の中にもたれかかった。どんなに頑張っても透のように腕を広げて抱きつくことはできなかった。

ふわり。腕の中に抱きしめられたとたん、透の腕の中で目覚めたときと同じ香水の香りを胸いっぱい吸い込んでしまう。

隣に並んでいたときは気づかないぐらいの香りだったのに、この特別な距離のときだけわかるようなわずかなものだった。

強い香りではないはずなのに、頭がクラクラして、百花は微(かす)かに背筋を震わせる。すると透が気遣うように言った。

「モモ、大丈夫？　怖くない？」

「へ、へーき……」

そう答えたけれど、実際は心臓が派手に暴れ回り呼吸が浅くなって、うまく息ができない。はぁはぁという自分の呼吸が妙に大きく聞こえて、これではまるで一人で興奮しているみたいだ。

「モモ、顔上げて」

言われるがままに視線を上げると、思っていたよりも近くに透の顔がある。外灯の明かりの加減で影ができてしまい、表情がよく見えないのが不安な気持ちに拍車をかけた。

「あ、の……」

もう離れた方がいい。この雰囲気でこの体勢なのだから、いくら男性との交際経験のない百花だって、次に何が来るのかは本能的にわかっていた。

透はそんな百花の葛藤に気づいているはずなのに、たっぷりと時間をかけて百花を見下ろしたあと、ゆっくりと端正な顔を傾ける。

「……っ」

顔を背(そむ)けなければダメだ。そう頭ではわかっているのに、透とキスをしてみたいという好奇心が疼(うず)く。躊躇(ちゅうちょ)している間に、百花の小さな唇に透のそれが重なっていた。

「……ん」

触れた瞬間、驚きからわずかに声が漏れる。透の唇は想像していたよりも柔らかくて、それに少しひんやりとしていた。

透は何度か角度を変えて、ゆっくりと唇や口の端にキスをする。唇と唇を重ねるだけの優しいキスは、まるで子どもに教え込むように一つひとつの仕草が丁寧なのに、甘ったるい。擽(くすぐ)ったいような、もどかしいような、気持ちがいいのに満たされないような切ない気持ちになるキスだった。

「どう？」

どれくらいの時間そうしていたのだろう。透の声に意識が現実に戻ってくる。

「……」

「大丈夫？」

もう一度問いかけられ、百花は子どものようにこっくりと頷(うなず)いた。

頭がジンジンとして熱を持っていて、考えがまとまらない。たった今夢から覚めたみたいに頭がぼんやりしていて、終わってみるとよく覚えていなくて、唇の熱さだけが妙に生々しい。

透は呆けたままの百花に苦笑して、手のひらで優しく頬を撫でた。

「今夜ベッドに入ったら俺とキスしたことを思い出してみて」

まるで暗示のような言葉に、百花はもう一度頷くしかなかった。

実際にこのキスは暗示だったのではないかと、百花は後になってから思ったことがある。

このとき、百花は透のことをさらに意識する魔法をかけられてしまったのだ。

2

透の本気発言から一月ほどが過ぎた。恋人らしいことを試してみようという透の提案で、何度か仕事終わりや休日に食事や買い物に出かけたけれど、特に大きな進展はない。

最初の提案の時のように手を繋ぐことはあっても、あの夜のようにキスをすることやそれ以上のことを求められなかったので、百花はすっかりこの状況に慣れてきてしまった。というか本当にキスをしたのかも疑いたくなってくるぐらい、これまで通りだった。

そもそも、透が百花を急かしてまで結婚を焦っているとは思えない。

年齢的には三十二歳で結婚していてもおかしくない年だが、地位もお金もあり容姿端麗でもあるから、その気になればいつでも結婚できると、本人も焦っていないのだろう。

百花はウエディングフェアの受付カウンターに座りながら、幸せそうなカップルのやりとりを見てそんなことを考えた。

今日も日曜出勤でウエディングフェアの手伝いに来ているのだが、式場見学に訪れるカップルはみんな幸せそうで、始終ニコニコしながら見つめ合っている。まさに幸せの絶頂という感じだ。

プランナーさんに言わせると、ここから本格的な式の準備になるとお互いの考えの違いや家の希望などがぶつかり合い、この幸せそうな笑顔が消えてしまうこともあるという。

ふと受付用紙に記入をしている女性の薬指に光る指輪に目が留まる。

考えてみれば、透と自分も一般的な順番では婚約者としてすでにこのラブラブ状態に達していなければおかしいが、相変わらず兄と妹という空気からは脱していない。

透に見つめられるとドキドキするが、よく少女漫画に出てくるような恋のときめきというよりは、物理的に近づかれることへのドキドキに似ている気がするのだ。

立ち読みサンプル
はここまで